

第6学年 社会科学習指導案

単元名「戦争を体験した人々とくらし」

～昭和10年代の朝日町の子どもたち～

(全8時間)

1 単元について

「イラクで日本人が連れ去られたそうです。銃で殺されていないといいです」朝の会の子どもの発表である。今も国と国が争っていること、人の命が奪われていることを子どもたちは知っている。そして、戦争をしてはいけない、傷ついた人たちはかわいそうと思っている。

しかし、今の日本が、過去の戦争で多くの犠牲を払い、今なお傷を抱えている人がいることなど知らないことが多い。

そんな子どもたちに、日本が戦時体制に移行していった経緯、戦争によってアジア・太平洋の国々に大きな被害を与えたことを理解させたい。また、国民のくらしがどうなっていったかを、朝日町の高齢者からの聞き取りを通して調べ、具体的にとらえ、切実な思いで考えさせたい。

この単元を学んだ後、「今の平和で豊かな朝日町や日本はたくさんの人たちの犠牲の上にある、悲惨な戦争を二度とくり返さない。」と考えたり、「お年寄り自分たちとはずいぶん違うくらしをしていたんだ。」と、地域の歴史に関心を持ち、耳をすませるような姿を願いたい。

そして、平和の尊さや自分の生き方について考える子にしたい。

2 単元の目標

- (1) 戦争の背景やその様子、戦時中の国民の生活などに関心を持ち、興味をもって意欲的に調べながら、我が国の歴史や伝統を大切に、平和な未来を築いていこうとする心情をもつことができる。

(関心・意欲・態度)

- (2) 戦争が国民生活に及ぼした影響や、戦場になった地域の被害の様子などについて問題意識を持ち、見通しをもって追究し、根拠を明らかにして適切に判断することができる。

(思考・判断)

- (3) 現在と戦争当時の生活の違いなどについて身近な調査活動をおこなったり、戦争当時

の資料を効果的に活用したりして、具体的にまとめ分かりやすく表現することができる。(観察・資料活用の技能・表現)

- (4) 戦争の歴史的背景や、我が国がアジア・太平洋地域において連合軍と戦って敗れたことなどを知り、国民や戦場となった諸国が大きな被害・損害を受けたことを理解することができる。(知識・理解)

3 研究と関わって

(1) 指導計画、単元構成の工夫

①ねらいにせまる人物の教材化

戦争を経験された地域の高齢者から直接話しを聞くことが、実感をもって事実をとらえることになり、事象の意味についての切実な追究意欲になると考えた。単元構成の手始めに朝日町の高齢者学級で発行されている冊子「かたりべ」を読んだ。経験された方ならではの描写や言葉に引き込まれ圧倒された。早速、戦時中の生活について書かれている方の住所を調べ、問い合わせたり訪ねたりすると、総集編の発行から4年経っていることもあり、亡くなられていたり、都会の息子さんの所へ移ってみえたり、「昔のことは忘れた」と言われる方もあった。そんな中で何人かの方に直接お会いできたことは貴重であった。当時のことをすらすら語られ「ありがたい」「今は夢のようです」そして「1日も忘れたことはない」という言葉が、経験の重さを表していると感じた。この感動を子どもたちに経験させたいと思った。

この単元では3人の方から学びたい。当時の日本が外国に土地と資源を求めていたことの身近な象徴として『満州開拓団』に参加された方『銃後を守る』女性の方、そして航空隊の岩本義夫さんである。

岩本義夫さんからは、当時小学生の少年が「死ぬかもしれないのに航空隊を志願した」という事実を通して、死ぬことの怖さを越えた思いや行動が当時の日本を支配し、教育も人々もその中であつたことを考えたい。また、取材の中で子どもたちに伝えられた『人間が人間であるためには、どんな思いがあっても、どう転んでも、決して他人を殺める側の人間になってはいけない』と、という言葉大切にしたい。

②社会的事象をとらえる指導計画の作成・単元構成の工夫

終戦を決定づけた、悲惨な広島・長崎の原爆の映像資料から導入し「一度に30万人も亡くなる悲惨な戦争とはどういうものなのか」という誰もが強く抱く疑問を、単元をつらぬく課題としたい。そして、戦争の始まり、広がり、戦場になった国々の人々の生活、日本の人々の生活、戦争の終わり、と児童の意識をつながながら授業を進める。それぞれの授業の終末には課題に対しての学びと同時に次の疑問（課題）がもてるような発問や資料の提示をしていきたい。

(2) 学習活動の工夫

①ねらいを明確にした学習活動の工夫

課題作りでは、子どもたちの追究意欲がふくらむように資料を提示する。戦死者の推移のグラフでは「増えている」だけでなく「何人に一人は戦争に行き死んでいる」と、具体的にとらえさせる。岩本義夫さんについても、地域に育ち自分たちと同じ朝日小の子どもであったことを伝え、身近な同じ年頃の少年がであることをとらえさせる。そして、その岩本少年が自分たちとは全く違う、死んでしまうかもしれない「兵隊になりたい」という願いをもったことに驚きをもたせ、本時のねらいに迫る学習活動をスタートしたい。

個人追究では、資料から岩本少年の気持ち、当時の教育、生活の様子など多面的に事実がつけられるよう、友達と話し合ったり、教師の助言を生かせるような場を設定する。

まとめでは、記述の書き出しの言葉を提示することで、ねらいに沿った一人一人の学びが表現できるようにしたい。

②仲間と練り合う交流活動の工夫

課題『死ぬかもしれないのに、なぜ、岩本少年は自分から兵隊になろうと思ったのだろう』に対して3つの視点から考えられるように資料を提示する。

資料⑭「岩本義夫さんと林討治さんの文」からは、先輩から直接航空隊の話聞き航空隊にあこがれた岩本少年と丙種合格で肩身が狭かったという林少年を対比させながら、当時の少年

が兵隊になることをどのようにとらえていたのか考えさせる。

資料⑮の「軍事教練や当時の教科書」からは戦うことや兵隊になり死ぬことを正しいことと教えていた当時の教育を考えさせる。

資料⑯の「出征を祝う人々・街の標語」（写真）からは、死ぬかもしれない兵隊を祝って送る人々や戦争に勝つことを誰もが信じていた社会の様子について考えさせたい。

資料をもとに、あこがれていた、正しいことだと思っていた、まわりの人も戦争で勝つことを願っていたなどの考えをもつことができる。

そこで、「兵隊になったら生きて帰ることができないんだよ。みんなだったら兵隊になって戦争に行きたいと思う？」と、切り返しの発問をしたい。

その中で「私は行かない、死ぬのはいやだ。」という子どもの考えに対して、もう一度「でも、岩本さんは死ぬかもしれないのに兵隊になったんだね、なぜだろう」と問いかけたい。

そして「死ぬのは怖いけど、国のため天皇のために死ぬのは名誉なことだと教えられ考えられていたから、岩本少年もそう考えているだろう」という、死に対しての子どもの考えが出てきた時、岩本さんの「さほど思わなかった」という言葉を提示する。

そうして、子どもたちに、自分と岩本少年の死への畏れの違いに気付かせ、死ぬことをさほど怖いと思わないような世の中にしてしまう戦争を「人間らしい心までゆがめてしまう」ととらえさせたい。

(3) 指導・援助、評価の工夫

①調べ考える指導・援助の工夫

資料から自分の考えがもてない子には、「今の教科書には兵隊の絵があるかな」というように視点を示す。仲間との練り合いで発言できない子には「・・・さんの意見についてあなたはどこう思う」と尋ね、自分の考えを言葉にさせたい。

②学びを確かにする相互、自己評価の工夫

課題に対して見つけたことをノートに書き、学習して分かったことをノートに書くことが自己評価になり、自分と仲間の考えを比べながら聞くことが相互評価につながると考える。

